

新学習指導要領における 学びと指導

横浜国立大学教授

高木まさき

生徒のことをよく理解する

甲斐先生が「もっている力だけで勝負しない」ということを意識されているように、難しさや苦勞を乗り越えるための試行錯誤や葛藤の中でこそ「深い学び」は生まれま

す。「うまくできるか」だけでなく、そこにたどり着くまでのプロセスを大切にしたい授業づくりを意識することが大切です。

生きる力につながる学び

また、植田先生が話されている「自分の力の未熟さを自覚し、自身に足りない力を獲得する」という学びは、新学習指導要領の評価の観点である「主体的に学習に取り組む態度」において評価される「粘り強い

取り組みの中で、自らの学習を調整しようとしている」にあたるといえるでしょう。ここをきちんと指導・評価するためにも、生徒の学習の実態を常に把握することが必要不可欠です。

教師にとつての楽しさ

対談の中で、「自分事として」という言葉が何度か登場しますが、言葉によるものの見方・考え方を働かせて、自分事として学習に取り組むことで、生徒は言葉の表面以外にある「奥行き」を知ることができ

ます。「ただの情報として読む」のではなく、「実感をもって読む」経験を積むことで、作品世界の深さや厚みに気づくことができ

るはず。その中で「国語科を学ぶ価値」も実感できるのではないのでしょうか。

そうすれば、他の単元や教科の授業にお



1958年、静岡県生まれ。横浜国立大学教授。中央教育審議会国語ワーキンググループ委員、全国的な学力調査の実施方法等に関する専門家検討会議委員などを歴任する。「ことばと学びをひらく会」会長。著書に『「他者」を発見する国語の授業』（大修館書店）など。光村図書 小学校・中学校『国語』教科書編集委員を務める。